

Kalahari Honey

ボツワナ (アフリカ)

養蜂プロデュースにより「野生ゾウの食害」から農家を守る仕組みの構築



ボツワナの農村で生まれた同社の創業者は、村々が野生ゾウの食害に苦しむ様子を見ながら育った。農民たちが銃で武装して、ゾウに対抗する中、自然の習性を利用し、ビジネスベースで問題解決することを志して創業された同社は、環境保護と収入増を両立させ人々の支持を得ている。



背景にある社会課題

- 同国はアフリカ最大のゾウの生息地であり、人とゾウの共存が課題となっている。
- 農家の耕作地がゾウの生息域と重なるため、度々ゾウの襲撃を受け、毎年、死者が出ている。

ビジネスモデルと製品の特徴

- ゾウに蜜蜂を避ける習性があることを利用し、養蜂の普及によって、農地と増の生息域の間に緩衝地帯を構築している。
- 同社自身は農村や農家に対してトレーニングを提供、希望する農家に養蜂の器具を販売・貸与し、できた蜂蜜を買い取り、製品化して販売している。

SDGビジネスへのアプローチ

- ゾウの襲撃に対し、これまでは銃で対抗していたが、その効果は薄かった。これに対し、自然の習性を利用し、動物も人も傷付かず、さらには利益が出る形で問題を解消。養蜂を導入した農村では銃による対処が不要となっている。
- 農家のなかでも女性をターゲットとして養蜂を普及させ、収入に貢献する形を作ることで、女性の農村内及び家庭内での地位を向上させている。結果として、家庭内暴力等が目に見えて減少したことが報告されている。
- 経済的にメリットのある（ゾウに対する）防壁であるため、持続可能で、かつ拡大しやすい。

SDGsへのインパクト

- 同社の支援により「800農家」が養蜂を行っており、農家同士が分散している同国の状況下では、広い範囲をカバーしている。
- 養蜂の導入は、女性の地位向上、農村の環境保護意識の高まりをもたらしている。

成功のポイント

- ① ゾウ害という農家に共通する課題に対して、取り組みやすい解決策を提供している
- ② 自然の修正を利用した解決策であり環境負荷がなく、持続可能である
- ③ 女性にターゲットを絞り、農家に新たな収入をもたらし、女性の地位向上に貢献している

